

## 家族からの卒業と自分の道を歩くこと

### 生い立ち

私の家族は二世帯住宅の八人家族。母と父、二人の妹と歳の離れた弟、そして祖父母。幼い頃には叔母も一緒に住んでいた。母は五人兄弟姉妹の四番目で、父は四人兄弟の一番上。両親は高卒で、経済的に豊かでない家庭で育った。

父母の基本的な教育方針は、「子供のやりたいようにさせること。それを支えること」。そうは言っても、人生の時々で訪れる進路決定のたびに喧嘩し、反対された。そのたびに家族なんて、たまたま血がつながっているだけの他人だと反発し、理解してもらえないことに失望した。それでも最終的には自分の意見を通し、またそれを受け入れてくれるのは、こういう立場にいるからなのだと思う。

この方針は父の意向によるところが大きい。父は大学進学を望み、そのチャンス・能力もあったが、貧しかったために進めなかった。父のこの経験が子供たちの進路に関しては、なるべく希望通りにさせてやりたいということにつながっているのだと聞いている。母は全面的に賛成している訳ではなく、何かしら思うようなところがあるみたいだが、父の方針に従っていた。

### 両親との関係

こうした教育方針のおかげで私は大学に通い、学ぶことができていた。しかし、視野が広くなり、両親のことまでよく考えられるようになった今、「子供の希望通り」というのは父にとつて、「子供が自分の描く通りの進路を進んだとき」になされるものなのだと分かった。父は私を「私」として見るのではなく、父が望むとおりに動く存在、そういったフィルターを通して私を見ている部分もあるのだと、最近気づいた。育児にほとんど参加せず、仕事の関係で触れ合うことがなかった分、子供を知ることができなかったから。

それとは反対によく私をみているのは母。母も母で、「こういう子供であってほしい」と望むものはあったと思う。「こういう道に進んでほしい」とも。しかし一番多くの時間を共有しているだけあって、それは叶わないものであり、子供は自分たちの思い通りには進んでくれないのだということに、段々と思い知らされていったのだと思う。母が私の進路を最終的に、「頑張りなさい」と言って認めるとき、それは素直に応援するのではなく、諦めからきているものと感じるようになった。分かっているからこそ、反対するよりも応援することを選んだだけなのではないかと考えている。

### 家族が与えた影響

一二年間の中で様々な経験をし、また様々な経験をした人たちと出会ってきた。その中で様々な視野を持つようになり、今

まで持っていた視野でも、別の角度から考えるぐらいには成長した。両親の立場や考え、家族の関係について想いを馳せることができたとき、私の本質が、家族、特に両親との関係と切っても切り離せないものであり、同時に自分自身を縛りつけていることに気がついた。自己の存在を肯定し大切にすること、そして誰かのためではなく、自分自身のために生きること。大学に入り、この問題に直面し、ずっと悩み苦しんできたし、問題は自身自身にあると感じていた。

ただ実際には、それが形成される要因は私だけの問題ではなかった。両親の思いや考えは私が成長し、自分自身を形成していく上で大きく影響していた。両親から認めてもらえなかったことは、自己の存在を肯定できないことにつながったし、「長女」という立場は、自分よりも他者を優先させることに結びついた。

### 両親にとつての「私」、私にとつての「両親」

両親にとつて私は初めての子供。両親にとつて、子供に関することはすべてが初めてづくしだった。だからこそ気負いもあっただろうし、期待や希望もあっただろう。そんな両親の下で育った私は、幼いころからずっと自分にかける期待と希望を感じ取っていた。期待する分だけ味わうことにもなる両親の失望、落胆も同じように感じていた。「私」という存在そのものが、両親にとつて周りから渡される（通知表）のようなものだったのだろう。だから「失敗」は許されなかった。

人の感情に敏感で、感じ取ることができてしまったので、両親の感情を読み取って行動していた。両親の気負いや期待を感じていた分、失敗することいけないことだという意識が根づいていたし、「いい子」であることを自分自身に課していた。そうすれば両親が喜んでくれたからだ。両親の反応、言葉など目に見える形で、自分を肯定してもらえて、ようやく自己の存在を肯定することができた。

周りの人に対してもそうで、人に合わせて行動してしまうことが多かったのは、両親との関係が影響していた。それは結果的に自分を押し殺し、悪く言えば自分で自分の主体性を殺していくことになった。

期待が高いため、両親が私に満足することは少なかった。勉強、スポーツなどで良い成績を残しても、褒められることは少なく、もつとできる子と比較し、「もつと上はいるのに、あなたはこれくらいしかできないの」という言葉しかかけなかった。勉強やスポーツはできない訳ではないがよくできる訳でなく、両親からしてみれば、よくできる部類に入って欲しかったのだと思う。だから褒められるよりも、「もつと頑張りなさい」と言われることの方が多かった。

無意識のうちにそうしたことを感じ取っていた私は、両親の期待から外れないように行動し、自分のためというよりは、両親を喜ばせるために頑張っていた面もあった。母や父が私のことで悲しんだり、何か言われたりすることが本当に嫌いで、そうならないようにしなければいけないと思い込んでいた。両親のその

態度が、私にとつては、「いらぬ子、ダメな子」と言われているような気がしてならなかった。私が、これまで自分の努力や頑張りを認めてあげなかったのは、このことが原因だった。

### 中途半端な状態であることのストレス

しかし一方で、自分の考え通りに行動したいという気持ちもあった。誰の目を気にするのでもなく、自由でいること。親戚や周りに同年代が少なかったため、可愛がられ、両親からは期待も愛情もかけられていた。他人を気にする一方で、感情のままに行動する面もあった。

ただその頃は、こうした面をどのように処理し、どう受け止めたいのか分からなかったし、矛盾した面を抱えていたことは、強いストレスになっていた。それだけでなく、両親の期待に応えなければならぬこと、その他もろもろのことが心に溜まっていた。それは相当なストレスだったと思う。

それを発散させるために、よく癩癩をおこしていた。癩癩をおこすことで溜まっている感情を吐き出し、また溜めながら生活するというのが、中学生くらいまで続いていた。そうでもしないと、自分が壊れてしまうという思いがあった。癩癩をおこすことで周りの人間に助けを求め、私が追いつめられていることに気づいて欲しかった。

だけど、気づいて欲しかった両親には気づいてもらえず、当時一緒に住んでいた叔母だけが気づいてくれた。こうした思いに気づけるほど、当時の両親に余裕があった訳ではなかっただけなの

だ。両親のかわりに叔母が話を聞いてくれ、色々な話をしてくれた。それがとても嬉しかったし、そういう人が身近にいたからこそ、自分だけの殻に閉じこもることなく成長できた。

### 「長女」でいることの重圧

両親の思い入れだけでなく、長女であったことも自己形成に影響していった。長女であることは私に、「自分がしっかりしなければならぬ」という意識を植えつけていった。両親や周りからそう言われたのもあったし、それが当たり前という風潮があったからかもしれない。男の子だったら、もしかしたら違っていたかもしれない。物心ついて、兄弟が生まれたことや両親が苦労しているのを見ていた。

そんな中で育った私は、自分自身を一番にすることはいけないような気がして、自分よりも常に周りを意識することが多かった。なるべく両親の負担にならないように、自分ができることは自分でやって、迷惑のかからないようにといつも考えていた。だから周りに素直に甘えることなんてできなかったし、「私はこうしたい」と言うこともなかなかできなかった。よくわがままだと言われるけど、本当の意味でわがままを言ったことは、意外にはないかと思う。

### 自分を様々な枠に押し込み、閉じ込めて生きていた

中学生まではこうした考えにずっと囚われていた。両親や家族に縛られ、そこに依拠していた。失敗はいけないこと、しっかり

すること、もつと頑張ること。他者から必要とされなかったり、認めてもらえないことが恐怖だった。頑張ることが一番の方法であり、それを一番認めてもらいたかったのが両親だった。

だが、どんなに頑張つても認めてくれない両親を見るたびに、自己を否定されているかのように感じた。「認めてもらうためにはもつと頑張らなきゃ、もつと努力しなければ」と自分を追いつめ、だんだんと、何もかも完璧にしなければならぬと考えるようになっていった。しかし、完璧を求めれば何をやっても満足できなくなる。そしてまた自己嫌悪に陥る。そんなことを繰り返していた。

比較されることに敏感だった私は、目に見えるものでしか人は私を見てくれないと思いつ込んでいた。目に見える形で示される、学校の成績、模試、容姿は私にとつても両親にとつても重要なものだった。不思議なことに、どこかでそんなもので自分の存在は評価できない、「私は私」という思いもあった。

だからその思いが強いつき、こうしたもので両親から何か言われたり、比べられたりすることが嫌だった。どうして評価され比較されなければならぬのか。これでいいじゃないと感じ、比べようとする両親に反発していた。反発はするけれども、それだけで、自分の中で価値観が変わることもなかったし、「自分は自分」と思う気持ちは、いつも小さいものだった。

いい成績、よい結果を目指すことは、両親や周りから褒められたいのためにやっていた部分がある一方で、良い結果を出すことが単純に嬉しかった。しかし、自分のために何かをやることは

ダメなんじゃないかと、不安に思う気持ちもあって、とても中途半端だった。

### 「私」を見てくれていた叔母

いろんなことに縛りつけられていた私は、毎日が窮屈で息苦しかった。自由でいられないこと、できないことが多かったからだ。自由にできない原因は家族だと思い、自分を縛りつける家族、特に母に対する反発が生まれ、不満は母に向かった。母と接する時間が多くて、母が評価者であることが多かったからだ。

しかし母の姿を見ると、自分のための時間よりも人のために動く時間の方が圧倒的に多い。家族のため、子供のために自分を犠牲にする母の生き方を見たとき、「つまらない」と思ってしまった。反発心も手伝って、「絶対に母親にはならない、母のような生き方なんて絶対にしない」と決めていた。それだけ何かに自分を押さえつけられることに、我慢がならなかった。

こう考えるようになったのは、叔母の影響が大きかった。叔母は当時も今も独身で、様々な職についていた。海外に行ったり、海が好きだから海のある場所に住んだり、手に職をつけるために美容師の資格をとったりと、自分のために生きている人だった。叔母のそんな姿は、窮屈さを強く感じていた私にとって輝いて見えたし、それは今も変わらない。よく海外の話をしてくれ、日本以外の世界があること、今いる場所で起きていることがすべてではないのだと思うきっかけを作ってくれた。海外に住みたいという気持ちや、現在語学に興味を持ち勉強しているのも、

叔母がそのきつかけをくれたからだ。

両親と違い、対等な存在として「私」をちゃんと見てくれ、話を聞いてくれた。叔母の前でなら、素直に将来のことや自分がやりたいこと、好きなことを話すことができた。叔母の生き方や姿勢は母とは違うもので、私は母の生き方よりも叔母の生き方に惹かれていた。一緒に住んだ時間は長くはないけど、大きな影響を与えてくれた人だし、叔母は、私に自己を輝かせる生き方の一つを見せてくれた。そのことが後の進路に大きく影響したし、迷ったとき、助けにもなった。

### 家族から離れ始めた高校時代

このような状態から抜け出し、縛りつけているものから離れるようになったのは高校生のときから。通っていた高校が市外で、部活をやり出したため、家族と過ごす時間が減ったからだった。家族と距離が置かれたことで、少しずつのびのびと生活できるようになっていった。その分、両親に反発することの方が多くなつていったのもこの時期からだった。

高校進学、「進路」を考えることは、自分自身と向き合おうことである。自分がどうしたいのか、何をやりたいのか考えた。あまり両親のことを意識することなく自分の行きたい高校を決め、反対されながらも合格し進学できたからだ。自分を最優先にして行動するという形を決めることができた出来事でもあり、進路を決める時期になるたびに形になっていった。高校進学は、私自身が「私」という存在を明確に自覚する出来事となつ

た。だから志望校に合格したとき、すごく嬉しかった。

### 妹の存在

そしてもう一つ。高校合格は一つしか違わない妹と離れ、更に妹が別の高校に進学したことで、別々の道を歩くようになる節目にもなった。

すぐ下の妹とは兄弟の中で一番近い存在だ。歳が一つしか違わなかったせいで一緒に育ち、小さい頃には何をするのも一緒だった。それは当たり前で、妹というよりも友達に近い存在だった。だが、小学校に上がると、妹と似ている部分よりも違つている部分の方が大きくなり、私たち自身も違いを自覚するようになっていった。私と妹は違う存在なのだと、周りから認識されていることに気づいたのもこの頃である。二人の違いは、どちらが良くてどちらが良くないか、といった比較の材料になつた。

違いを自覚するようになると、妹の存在は私にとって自分を映す〈鏡〉のようなものだった。いい部分も悪い部分も映してしまふ、そんな存在だった。長女であるが故の期待や責任感に縛られていた私にとつて、両親に可愛がられ、わがままを言つて怒られながらも、笑つて聞いてもらえることのできる妹がうらやましくて仕方なかったし、何も背負うものがないように見える妹を僻(ひが)んでいたりもした。

妹は図工や体育、私は国語や社会が得意といった図式が小学生の頃からでき始め、中学になると、真面目で地味な姉と派手

で可愛らしい妹、勉強ができる姉と、部活をがんばる妹。分かりやすい差異であるがために比較したりされるのが容易にできて、比べられ、そのたびに劣等感に苛まれ、存在価値がないような気がしていた。だから妹と同じ学校というのは辛かった。

小中高と勉強を頑張っていたのは、もちろん好きだったんだけど、それが妹に対抗でき、両親から褒められ、期待に添うことのできそうな唯一のものだったという面もあった。妹に対して劣等感の方が大きかった私には、それしかなかった。

ただ、仲が悪いという訳ではなく、こういつたことを別にすれば、叔母の次に家族の中では何でも話せる存在だった。ケンカもしたし、一緒にテレビを見て、たくさんのお話を話した。だが、ふとした瞬間に妹に感じる劣等感が心に浮かんで、一緒にいながらも、どうしようもない気持ちで過ごすこともあった。

## 二人で生み出した「差異」

高校に進学し、妹が私とは別の高校に進学すると、比較されることはさらに減った。ようやく妹から解放された気がして、肩の荷が少しおちた。私にとっては、今まで同じ学校という土台に乗っていたが、別々の学校に行きだしたことで、私は私、妹は妹と、互いの違いを受け入れることにつながった。

だからといって、互いの存在を素直に受け入れた訳ではなく、違いを認めても、妹よりも優位にたいたい、勝ちたいという感情はあった。中学のときにはやらなかった部活をやることで、高校に入ってから部活をやらなかった妹を見返してやろうなどと

いう、「あさましさ」もあった。こう思ってしまう自分が嫌で、一時期、妹とはよい関係ではなかった。

様々な経験を得て少し余裕をもって考えられるようになって、私たちのこの差異は、自然と作りだされていったものではなく、私たち自身が、意図的に作り出していったものではないかと思えてきた。長女であり、一番上であることに苦しんできたけど、その代わり与えられるものも多く、例えば服や道具など新しいものを無条件に与えてもらっていたし、そのことは当たり前すぎて当然と思っていた。私がなんでも最初に手をつけてしまうので、そこで私ができるようにしてしまえば、それは「私」のものだった。

それに比べて妹は、私のお下がりがりばかり与えられ、なんでも、「お姉ちゃん」の後に行くしかない。私も自分の存在をどう思うかでとても苦しんだけど、妹は妹で苦しんだのだと思う。私と比較されることも、私が苦しんだように妹も苦しんでいたのかもしれない。私との違いを主張していくことでしか、自分の存在をアピールし、「妹」の存在を知覚してもらおうことができなかったのではないかと思う。

以前、妹がこんな言葉をもたらした。「あなたは両親からとても大切にされていたけど、私はそうじゃなかった」と。私は妹がうらやましく妬ましく思う時期もあったけれど、妹は妹で、色々と悩み苦しむ時期があったのだと気がついた。悩み続けた差異は自分たちが生み出していったものだった。

## 自分のために頑張った部活

勉強がしたくて進んだ高校だったが、入学すると勉強よりも部活動を頑張った。今まで、「誰かのために」をきっかけにしてやるが多かったのが、高校でやった部活だけは、「自分のために」始めたことだったからだ。また努力した分だけ結果として出てくる、それも目に見える形で結果のである部活は、やっていて楽しかった。

部活をやつていなかったら、いくら市外の高校とはいえ、家族と接する時間はそれほど減らなかったと思う。部活に打ち込んだおかげで家族との時間も減り、それが結果的に家族に縛られることなく、のびのびと、「自分のために」何かをやる環境を生み出すことができた。そしてこのときの経験は今も私の財産となつている。

## 両親への反発

家族との時間が減ると、家族に対する不満やストレスが減り、癩癩を起すことは少なくなったが、その分両親と言いつつたり、反発することが多くなった。特に勉強の成績について言い争うことが多かった。

勉強に対して中途半端に向き合っていた状態から、「誰かのために」やるのはおかしい、ということだけは自覚していた。成績表や模試の結果を見ては、「もっと頑張りなさい」や「どうしてこの教科の成績は悪いの」と両親から言われることに納得がいかなかった。自分では満足のいく結果や、よく頑張ったと思ってい

た分、両親がそれを認めてくれないことが腹だたしかつた。過程を見ずに結果だけみて評価するというやり方が気に入らなかつた。高卒で終わっている両親に対しての軽蔑も交じっていたかもしれない。

何よりも自分のことなのにいろいろと言われるのが、すごく嫌だつた。高校三年生ぐらいからはそれが嫌で、わざと成績表や模試の結果を見せなかつた。それは大学に入ってからもたまにやっていた。それでも、「誰のおかげで通っているんだ」と言われると何も言い返せなくて、その当時はそれが悔しかつたし、そういう言い方をする両親は卑怯だと感じていた。

特に父は、その結果だけを見て判断する傾向が強かつた。だが母よりも圧倒的に接する時間が短かつたので、私の反発は母に強く向かつた。かわりに、父には反発よりも、なんとかして気に入ってもらいたい、喜んでもらいたい、認めてもらいたいという気持ちが強かつた。そのために勉強をやっていたわけではなかつたけど、良い結果が出たら喜んでくれるだろうと思っていたし、褒めるぐらいはしてほしかつた。だが父がそうしてくれることは滅多になかつた。自身の気持ちを言葉で伝えることをしない人で、父の気持ちがわからず、いい結果を出せば振り向いてくれるはずと考えていた。

## 大学受験失敗がもたらしたもの

高校三年生になり、進路を決めなければならぬ時期に、私は自分自身と向き合うことから逃げた。なんとなく大学に行か

なきやと感じ、親が喜びそうな国立を志望校にし、親がダメというから私立は行かないという、かなり無責任でいい加減な態度だった。あれほど反発していた両親を、自分の逃げ場にしたのだ。いい加減だったけれども、志望校を決め、やると決めた以上は頑張った。だがダメだった。

なんのために大学に行くのか、何をやりたいのか、そうした問いに向き合うことなく大学を決め、なんとなく受験勉強をしていた私にとつて、落ちた後、浪人してもう一度、国立を目指すのか、それとも滑り止めで合格している私立の大学に通うのか決めなければならなかったとき、ものすごく迷った。自分が選んだ学部で迷いが出ていたし、どうして大学に行きたいのか自分自身で見いだせなかった。ただ、どちらを選んでも絶対に後悔はするということだけは確信できた。

最終的に私立に通うことを選んだのは、自分の中で国立に行く意味が見いだせない中で、浪人し、国立を目指すことは自分のためではなく、父のため、父の期待に応えるためだとわかったことが一つの理由だった。それだけはやってはいけないと、なぜかはつきりと思つたことを覚えている。密かに両親が、浪人し国立を目指すことを望んでいたこともわかつていたから、その期待に逆らう気持ちもあった。私立に行くと言ったとき、案の定、落胆された。

両親の落胆は、落ちたことで自己否定されたような気がした私に、追い打ちをかけた。私立に行くことが悪いかのような思いになつて、自分で選んだことだが、罪悪感に苛まれ、それは入学

してからもずっと心の中にあつた。家族も祝福していいのかわからなかったようで、ハレモノを扱うような態度だった。そんな中で叔母だけは祝福してくれた。思わず、「希望の大学には行けなくて、滑り止めの大学なんだよ」と言つたのだが、叔母だけは、「大学に行けることだけでもすごいんだよ」といつて気にしなかった。その言葉が一番うれしかった。

両親にとつて娘の大学失敗はショックだったのだと思う。期待どおりにいかなかったという思いもあつただろうし、自分たちには無縁だった、「国立」という希望が手に入るかもしれない分、失望も大きかつただろう。娘の行きたい大学に行かせてやれなかつたという気持ちもあつたかもしれない。でも当時の私は、自分のことで精一杯で、両親が何を考えているかまでは考えようと思わず、失望されているという事実だけに目を向け、自分に失望する両親を見たくなくて会話するのを避けていた。

滑り止めの大学に通いしたが、自分自身も気持ちの整理がつかない上に、両親も望んでいなかったのも重なって、大学に落ちてしまった自分の存在を否定ばかりしていた。一番やってはいけない「失敗」をやってしまったことで、頭の中には負け組という言葉がひたすら浮かんで、人生はもうおしまいだとか、人生に傷がついたとかそんなことばかり考えていた。

ただ行きたい大学に行けなかつたことは、良くも悪くも、今度は後悔しないように頑張ろうと思ふきつかけになり、高校のときは頑張らなかつた勉強をかなり頑張った。このとき初めて勉強に対する中途半端な状態から抜け出した。誰かのためではな



く自分のためにできた。真剣に打ち込んだ結果、学ぶことが楽しくてしかたなかった。

私立の大学では勉強も頑張ったが、「失敗」してしまったことの反動でどんなことも頑張らなきゃと思ひ、対人関係、部活、バイトにも勉強と同じくらいのエネルギをかけた。向き合った分だけ自分に戻ってきたが、良い結果だけではなかった。特に周りの学生との関係では壁にぶち当たった。

私は、人から良い評価をうけること、他人を否定して自己を優位に立たせることでしか、自分を保てなかった。最初に通った大学は決してレベルの高い大学ではなく、そこに通う学生も、高校にはいないタイプの人たちばかりだった。高校での似たような考えや能力を持つ集団で生活することに慣れていたので、自分と明確に違う存在とどう接していけばいいのか迷った。迷った結果、自信が持てない「私」という存在を隠していくことで、周りと付き合つていこうとした。人と一生懸命に向き合おうとしたし、自分自身とも向き合い続けただけど、どちらも真剣には向き合つていなかったのだと思う。

自分を隠しながら人と接することは想像以上につらく、自分を大切にできない行為だったと思う。自分を大切にできなかったから、結局、人も大切にできなかった。

自分自身の存在を肯定するということ。これは大学に通い始めてから初めて自覚した問題だった。そしてもう一つ自分を大切にすると同じように、他者の存在も肯定しその違いを受け入れること、高校とは全く違う環境、人ばかりの中で、今まで

自分と似たような考え方や行動する人としか一緒に過ごさなかった私にとつては初めての経験だった。この大学では自分と他者との違いが明確で、(土台)が異なるということがどんなものなのかを痛感した。

勉強、対人関係、部活などすべてにおいて完璧にやろうとし、常に全力で頑張り続けてきた結果、一年のおわりに精神的に参ってしまった。生まれて初めて、頑張りたくても頑張れないという状況まで追い込んでしまっていた。心が完全に折れた。今でもあのときのことを思い出すとぞつとする。もう頑張れないと思うことがどんなにつらいか思い知った。

こんな状況であつても両親や家族には相談することができなかった。心配をかけたくないという思いもあつた。一方で親には「頑張れ」としか言われないだろうし、理解されないかもしれないと思ひ、言い出すことができなかった。様々なフィルターを通してしか私を見ることになった両親に、本音を言ったところでわかつてもらえるはずもなかった。

### 自分のために生きること

ただこのおかげで、初めてまともに自分自身と向き合う時間も作ることができた。自分がどうしたいのか自分自身で選択する、人生に責任をもつということの重さを思い知った。向き合う中で、誰も肩代わりしてくれない不安と、自分で責任をもたなければならぬ恐怖で、毎日苛まれた。自分の進む道は真つ暗で、本当に光なんてあるのだろうかといつも思っていた。怖く

て泣いたこともあった。

大学のカウンセリングの先生、高校の部活の先輩、同期。そして大学の先生方。とにかく話を聞いてくれた。このときかけられた、「いやなことを無理に続ける必要はない、そこから逃げることは悪い」ことでもなんでもないよ。頑張らないこと勇気も必要だよ」という言葉にもごく心を動かされた。そのときに浮かんだ、「大学に留まり続ける必要ってある？」という疑問はその後の進路に大きく影響した。

大学そのものを辞めることも考えたが、私が「こうしたい」とまだ形にもならないものを、「こういう道もあるのだよ」といつて投げ返してくれ、それを元にまた考えるところという日々を送った。このとき、両親ではなく叔母に相談していた。叔母からの、「自分のやりたいことをやりなさい」という言葉も大きな支えとなったし、両親との難しい関係を考慮してのアドバイスもくれた。

自分の進路を決めるうえで決めていたのは、「誰かのため」ではなく、「自分のため」に決めること。「誰か」をもう言い訳にはしないことだった。そんな中で、「編入」という進路を選択したのは大学二年の初夏。悩み続けて、そろそろなんらかの形を決めなければと考えていたとき、ふと、「今まで頑張ってきたんだな」と思った。ずっと今までたくさんことを頑張ってきた。受験も大学での生活も。本当に一生懸命やっていた。だめだったこともあるし、良かったこともある。けどどれも、私自身がよく頑張ったと声をかけることは一度もなかった。それがようやく認められてそのことに気がついたら、涙が止まらなかった。

そこで初めて、周りの他者も自分が大切で、個性があり、取り繕う必要などないのだと、ようやく気づけた。それで次に進むことができた。漠然としていた「編入」という道に舵を切った。自分自身を縛りつけていたものから抜け出すことができた。誰かに、両親に肯定してほしいと思う前に、私が私を認めてあげること、それが一番大切なのだとようやく気づくことができた。

その歩みはジグザグで何度も、「これで本当にいいのだろうか」と不安になったし、「なんでこんな大変な道選んじゃったんだろう。留まり続ければ楽なのに」と思った。勉強もなかなか上手くないときもあった。その当時はそのことがすごく不安だった。だから受かったときはうれいのもあったけど、ほっとした気持ちの方がすごく大きかった。初めて自分で決めたことを最後まで形にし、自分の足で歩いた第一歩だった。

編入の勉強は英語、面接、小論文だったが、どうせやるなら楽しく、そして将来につながる内容で勉強する、それが柱だった。何よりも「国立」をあきらめたくなかった。道がないわけじゃない、可能性はゼロではなかった。妥協してあきらめて、折り合いをつけていくことも必要だと思っていたけれど、自分の道だけは絶対に妥協したくない。この気持ちを糧にして乗り切った。

この間、家族とは冷戦状態。両親は、娘が一度決めた、滑り止めの大学で学ぶことを受け入れ、応援しようとしていた矢先に突然の通告で、大激怒。私は私で理解しないことに失望した。それから両親にはいっさい相談しなかった。意地もあったけど、今まで反発しながらも両親に甘えてきた私にとって、両親に頼

らず、自分の力でできるところまでやりたかった。

### 今も悩み続けながら

合格して、そのあとも色々ゴタゴタはあったが、四月から新しい環境、大学での生活が始まった。家族と離れて暮らすようになって、家族という存在がどれだけ自分にとって大きな影響を与えていたかようやくわかった。それが自分自身を縛る鎖になつていたことも。そのことに気がついたとき、ずっと、自分のために生きることができなかつたと感じた。

それができなかつた一因は家族との関係が大きかった。誰かに認めてもらうために頑張る必要はないし、もつともつと頑張らなきゃと自分を縛りつける必要もなかつた。ずっと気にしていた両親も気にしなくてもいいのだと思うことができた。きつと両親も同じことを感じていると思う。私が成長したように両親も同じように成長している。

そのことに気づいたとき、私自身も覚悟をきめ、誰かに甘えて生きることから卒業しなければならぬということにも気づいた。それは今の私なら十分できることだ。

今もう一つの転換点にきている。それでも私ならできると信じている。他の誰でもなく、自分自身が信じてあげること。大切にする。それが悩みながらつかんだことで、それができなかつたのは家族の影響が大きかった。それでも家族を否定するのではなく、家族だつて一人の人間であること、一人の人間としてこれから向き合っていけば、今までできなかつた関係を築くことが

できる。それができるくらいには、全員が成長した。

私はずっと、両親に諦めてほしかつた。期待をかけることも、自分たちの思い通りの人生を歩ませようとするをやめて、私自身を見てほしかつた。その気持ちに気づいたこと、また自分を形作つたものの姿が分かつたことで、また一歩自分の道を歩くことできた。そして家族を否定するのではなく、ただ離れようとするのではなく、感謝し、私がそうしてもらいたかつたように、一人の人間として家族を見ていきたい。